論　文

地域・保護者・保育所の「協同的な関係」構築に関する実践的研究

島田　知和[1)]　　甲斐　　寛[2)]

Practical study about building “cooperative relations” between an area, parents, and a nursery school

Tomokazu SHIMADA[1)]　　Hiroshi KAI[2)]

【要　　旨】

本研究の目的は、地域・保護者・保育所が協同して行った行事「夕涼み会」の３年間の取り組みをそれぞれの関係性の変化を視点に分析・考察し、三者の間にいかにして「協同的な関係」が構築されていくかを明らかにすることであった。保育所を中心に地域、保護者との関係がそれぞれ経年に伴い変化し、３年目には地域・保護者・保育所による「目的を共有し、できることを互いに行う関係」へと発展した。こうした関係へ発展した要因として以下の３点が明らかとなった。①共有する目的がそれぞれの立場を超えて理解しやすいこと。②保育所が、自分たちが行っている保育や、子どもの育ちを地域や保護者へ丁寧に伝えられること。③行事等への参加において一人ひとりが自分のペースで無理のない範囲で参加できる体制づくりが行われたこと。今後の課題として、行事が「保育者全員で協同的に取り組む行事」になるための保育者集団のあり方についての検討が示唆された。

【キーワード】

協同的な活動　　地域行事　　保育所、地域、保護者との連携

Ⅰ．問題と目的

子ども子育て支援新制度が平成27年度より施行され、認定こども園の役割の一つとして、施設を利用していない家庭への支援が明確に位置付けられ、保育所の役割として地域の子育て支援のセンター的存在が求められ、地域、保護者と連携しながら様々な工夫を行っている。

さらに、平成29年度に新保育所保育指針、新幼稚園教育要領、新幼保連携型認定こども園保育教育要領が告示され、平成30年度４月より本格的な実施がなされる。保育所保育指針において、前保育所保育指針では「保護者支援」だったものが、本改訂では「子育て支援」へと変わった。ここには支援の対象が、保育所を利用して

[1)] 別府大学短期大学部　　[2)] よいこのくに保育園

いる保護者、家庭だけでなく、利用していない地域の子育て家庭への支援も対象になったことが明確に位置付けられている。

こうした制度の改定に加えて、子育て家庭を取り巻く環境は、少子化の進行に伴い、きょうだい数の減少や地域の子どもたち同士の関わりの希薄化など大きく変化している。さらに、地域や保護者同士の関係の希薄化から生まれる子育て家庭の「孤立化」は社会的な問題となっており、子育てにおいて育児不安を抱えている家庭が増えている。各地区に「子ども会」などと呼ばれるつながりがあり、以前はその地区で生活する子育て家庭のほとんどが所属していたが、現在では、両親ともに就労しており、子ども会へ参加できないことやアパート等で生活している子育て家庭の子ども会への参加率の低下などがみられ、子ども会の活動が難しくなっている地域も多い。加登田（2017）は、山口県の子ども会育成者からの地域子育てに関する意識調査から、子ども会活動の魅力や活動を活性化していくための展望について考察を行った。この意識調査から子ども会育成会長の年齢層による意識の違いが明らかとなり、子ども会活動を十分に経験していない親世代へその魅力や意義の伝達が課題とされていた。様々な年齢層の親同士が、お互いの思いや考えを十分に意見交換することが、子ども会活動活性化に必要だということが示唆された。子どもの豊かな育ちを支えるためには、地域や保護者との連携から生まれる多様な経験が必要となってくる。

湯谷・高橋（2017）は、保護者、地域、保育所の三者が、保育所内の環境構成の取り組みとして「子どもたちがしっかりと遊び込める環境づくり」を目的とし、協同している実践を報告している。園庭内に田んぼや池を作る作業を通して、三者が協力して行う中で、保育所が大切にしている保育内容を地域や保護者へ伝える機会となったり、子どもの育ちをそれぞれが語り合う場になるなど、三者の関係が深まっている報告がなされている。このように、地域、保護者、保育所が同じ目的を共有し、考えや意見を十分に交換、共有していく過程を通して「協同的な関係」が形成されていくと考えられる。

そこで、本研究では保育園、地域と保護者が行事を通して協同的な関係へ発展していく過程を「保護者と保育所の関係性の変化」「地域と保育所の関係性の変化」の２つの視点から詳細に分析・考察する。協同的な関係構築のための課題を整理するとともに、協同のあり方について分析、考察を行う。

Ⅱ．方法

大分市内に位置する定員121名のＹ保育園が毎年８月に実施している行事「夕涼み会」の平成27年度から平成29年度までの３年間の取り組みを対象に分析・考察を行う。保育園園長からの夕涼み会実施に向けた準備や実施後の反省などの実践報告やインタビュー記録をもとに、「保護者との関係性」「地域との関係性」という視点から、関係性が経年に伴い、どのように変化したか分析・考察を行う。

１．Ｙ保育園の概要

毎年30名前後の卒園児を送り出しつつ、その後の卒園児たちとの関わりや地域とのつながり、在園児の保護者との関係に希薄さを感じている。また、支援が必要な卒園児やその家庭とどのようにつながり、何ができるのかなどの課題を抱えており、地域の中における保育園の役割について模索している。

２．Ｙ保育園在園児の保護者の概要

夕涼み会取り組み初年度に園長から保護者へお願いをし、保護者会「Bouquet（ブーケ）」が発足した。保育園のクラス名が花の名前に由来していることから、花を束ねるものとして保護者会が考えた。発足に至る背景として、保育園が行っていることへの共通理解や、保護者同士のつながりが生まれればと思い、園長から提案をした。保護者会が発足して１年目は、保護者会の日程調整等や規約の作成は園長が中心となって行っていた。

３．Ｙ保育園が位置する地域の概要

子ども会が行う行事へ参加する子どもの数が年々減ってきている。その理由として、少子化による子どもの数の減少や、アパートで生活をしている家庭の増加、父母ともに就労している家庭の増加などの理由から子ども会へ参加していない家庭が多い。子ども会の活動として、新入生歓迎会や廃品回収、卒業生を送る会などを行っている。また、子ども会への参加家庭の減少だけでなく、地域内の関係自体も希薄化している。子ども会は、希薄化に対して寂しさを感じており、以前のような子ども会の活性化や地域のつながりの再構築などの対応を模索している。

４．「夕涼み会」について

以前、Ｍ地区で行っていた夏祭りの名称を「夕涼み会」と改め、保育園園長の提案により、子ども会の共同実施という形で再び行うことになった。夕涼み会の当初の目的として、卒園児が帰ってくる機会や地域の子どもたちとのつながりを作ることとして平成27年度より始めた。Ｍ地区にある保育園の役割として地域の子育て支援の一つとして貢献し、Ｙ保育園がＭ地区の中に子育て支援の拠点として位置づけられればという思いもあった。また子ども神楽や盆踊りなどを行っており、Ｍ地区に暮らす地域の方の参加も多く見られる。３年目となる平成29年度は、在園児や卒園児、地域の方々など総勢453人の来園者があった。

写真１．夕涼み会の様子

Ⅲ．結果及び考察

１年目の取り組み

Ｍ地区子ども会とＹ保育園の夕涼み会共同実施が決定して、子ども会会長と保育園園長を中心に目的や方法、規模などについて話し合いを進めた。その際に、参加する地域の小学生や保育園を利用する子どもたちそれぞれに以下のようなことを体験してもらいたいという願いのもと実施することになった。

①子ども会の小学生が客として参加するのではなく、幼い子どもたちと関わる上でどんな配慮があるか感じて欲しい。②保育園の子どもたちと小学生の異年齢交流を通して、憧れや思いやりなどをお互いに感じて欲しい。③地域行事を通して、自分の住んでいる地域への愛着心を持って欲しい。こうした願いのもと、夕涼み会実施に向けて準備を進めていった。

保育園園長からのインタビュー

これまでの本園では、乳児から年長へと各クラス担任が一生懸命に子ども達と関わって小学校就学へ子どもたちを送り出す。ごく当たり前だけど、この当たり前にどこか違和感と物足りなさがありました。だって、人の一生って小学校就学で終わるわけじゃありませんから。そんなぼんやりとした問題意識を抱きつつ、子ども会の会長と出会い、取り組みを開始した夕涼み会１年目。もう大反省でしたね。まずは、新たに取り組む活動の体験を保育園・保護者・地域で共有したいという段階でしたが、準備などの作業を負担に感じ過ぎてほしくないという思いから何もかもを勝手にやり過ぎました。結果、園内の職員を傍観者にしてしまいました。ただ、卒園児への案内が口コミだったにも関わらず、多くの子どもたちが帰ってきてくれたことは、保育者として本当に嬉しかったみたいです。

考察

地域における子育て支援の一つとして行事が位置付けられ、地域や保護者との関わりが生ま

れればという思いから夕涼み会が始まった。夕涼み会実施１年目では、保護者との関係は一緒に行事を作っていくというものではなく、まずは保育園が行う行事や日常の保育に興味を持ってもらい、一緒に子育てを楽しんでもらいたいという思いを伝えることから始めている。そのため、保護者会へは準備などの協力を特別依頼することはなく、参加する保護者一人ひとりが夕涼み会や子どもと一緒に過ごす時間を楽しんでもらうことを目的としている。つまり、１年目の保護者との関係は日常の保育や行事等を通して、保育園のことを理解してもらい**「子育ての楽しさを共有する関係」**を目指したといえる。夕涼み会当日には遊びコーナーなどの手伝いをしてくれる保護者がおり、初年度からも多くの保護者からの手伝いがあったことから、次年度に向けての「協同的な関係」の土台となったといえる。

子ども会と保育園が地域行事を実施したいという思いが一致したことから夕涼み会が始まった。保育園から子ども会へ共同実施を提案する際に、夕涼み会の目的や意図などの意見をお互いに出し合い、それをもとに保育園が主となり、運営や準備を行っている。子ども会からブルーシートなど当日必要な資材の貸し出しや、当日の運営においては、子ども会に所属する子どもたちの手伝いもあった。こうした取り組みは、地域との連携の第一歩となり地域と保育園における**「地域行事を共有する関係」**となったといえる。

２年目の取り組み

子ども会とは、子ども会会長が任期を継続したこともあり、連携はとてもスムーズに進行した。子ども会会長からは、「他にもお手伝いできることはありませんか」と問い合わせを受けながら準備が進行していった。

２年目の夕涼み会実施後に、子ども会会長から保育園園長へ、来年度の共同実施に向けて子ども会から意見が出ているとの話があり、子ども会との話し合いの場を設けた。保育園園長と子ども会役員の間で夕涼み会の意義や、これからの地域と保育園の連携のあり方など、地域と保育園がつながることで子どもたちの育ちへどのような影響があるかなどの話をした。この話し合いの中で、初めは異なる意見だったものが、話し合いが進むにつれて、互いの意見を受け止め合い、次第にこの行事の目的や意義の共有が行われていった。共同実施に向けて慎重な意見だった子ども会役員からも「やりましょう！その代わりもっとこうしたい！」などの意見が得られ、次年度からの主体的な参加が期待される結果となった。子ども会と保育園の話し合いの中で得られた意見は以下の通りである。

表１．子ども会役員からあげられた意見

- 翌年へ活かすためにも反省会を設けてほしい。
- 保育園・保護者会・子ども会で計画して実施したい
- 夕涼み会へ参加した際に、子ども会からの参加者が少し疎外感を感じる。
- 保育園・保護者会の各スタッフが名前で呼べるような工夫を設けてほしい。

保育園が保護者へお願いしてつくられたた保護者会が、２年目から主体的な活動となり、夕涼み会の準備段階において多くの参加があった。保護者会会長を中心に夕涼み会にかかる準備などの活動を楽しみ、保護者会としてどのような行事であれば、地域の小学生や保育園内の子どもたちが楽しめるものにできるかを考え、多くの意見が出されるようになった。遊びコーナーのワニたたき台の装飾や、保護者会から発行する手伝い募集のお便りなどの作成を行った。

写真２．ワニたたき台

また、今年度は保護者が気軽に園内の保育や園行事の運営などへ参加しやすい空気づくりから始めた。保護者から保育園に対する意見が出しやすいように「意見箱」の設置や、保育園と保護者が意見を交換し合う場を積極的に設けた。こうした取り組みを通して、保護者が日常の保育の中で感じている思いを保育園と共有し、丁寧に語り合う機会が増えている。

意見交換の場に参加した保護者からは「子どもの保育園での様子をくわしく聞けてよかった」「保育の意図やねらいなどが聞けて参考になった」「子どもの相談が他の保護者にできてよかった」などの好意的な意見が得られた。

保育園園長からのインタビュー

２年目はとにかく保護者会の活動内容が躍進した年でしたね。夕涼み会への参加のみならず、ご家庭の実費負担を軽減する「おさがり制度」や、ご家庭の「直接的には保育園へ伝えがたい思いの聞き取り」などの意義ある新たな取り組みの全ては、保護者会と対等に向き合い話し合っていく過程から導入されていきました。保育園がご家庭にとって、一方的な指導者としての立場であれば、あるいは協同的な関係でなければ、それらが導入されることは難しかったでしょうね。又、保護者会役員会や園内の職員会議において日々実感していますが、いいアイデアの発案から煮詰まっていくまでのプロセスは、形式や様式にこだわった堅苦しい話し会いの場の空気感ではなく、風通しのいい空気感がとっても大切なように思えます。参加者の心の余裕や遊び心が柔軟に伝え合えんな話し合いの場って、思いもよらぬ観点からの問題解決や手立てのヒントが結構転がっているんですよね。

夕涼み会２年目は子ども会とも大きな転機を迎えました。子ども会会長から、行事の共同実施継続に関する不安を聞いた時は、もうびっくりしましたよ。会長とはよくコミュニケーションが取れていたものの、不安な思いの発端はあまり話し込みができていない会長以外の方々からでしたね。早急な話し合いの場を設けて、丁寧に思いを伝え合ううちに、重々しい空気と地域の方々の厳格だった表情が和らいでいく姿を感じました。そして、この話し合いを越え、強固なつながりとなって３年目を迎えることができました。

保育園でも、保護者の方々と意見のぶつかり合いが生じることが時折ありますが、ご家庭毎に十人十色の思いがあれば、それはあって当然です。クレーマーやモンスターペアレントなんて表現もありますが、私は園の行いに意見を下さる方々は、思いの共有ができれば最大の理解者だって思っています。思いを声に出して苦言を伝えるのもパワーがいることですし、そんな方々は時として園の思いを代弁する発信者にもなって下さるんです。

考察

夕涼み会を始めて２年目となり、前年度に保育園と保護者の間に築いた「協同的な関係」の土台をもとに今年度は保護者会も行事の運営・準備等に主体的に参加していることがうかがえる。１年目から保護者にも運営に参加してもらうのではなく、まずは行事の楽しさを共有することから始めたことが、この２年目の保護者会の姿に影響していると考えられる。一度経験することによって、行事の楽しさや目的・意義が体験を伴って理解されたからこそ「もっとこうしたら楽しいのではないか」「去年より楽しい夕涼み会にしたい」などの意見が生まれ、主体的な参加が促されたといえる。

また、夕涼み会などの行事の準備や運営に参加してもらうだけではなく、日頃の保育におい

ても保護者一人ひとりの思いを少しでも多く、受け止めようと取り組んでいる。園長のインタビューから、保護者からの保育園に対する正直な意見について一つずつ応えていこうという保育園の姿勢が、保護者と保育園の**「意見や思いが互いに出しやすい関係」**を構築していったと考えられる。日常の保育の中で、活動の意図や環境構成への配慮、さらに表面には見えにくいが、保育園が子どもとの関わりにおいて大切にしていることや、保育内容などを丁寧に伝えていくことによって、意図や目的が共有され、協同的な関係へ少しずつ発展していくと考えられる。

地域の子ども会においては、２年目を終えて、次年度からの共同実施に対して慎重な意見が出され、子ども会と保育園との間で、お互いに夕涼み会実施に対する思いや、２年目を終えて感じている正直な感想を伝えあっている。地域の子どもたちと保育園を利用している子どもたちの異年齢交流から生まれる学びや、自分たちが生活している地域への愛着を感じて欲しいという夕涼み会を行う意図や目的を再確認し、次年度はさらによい夕涼み会にしようと決意を新たにしている。行事に対して当事者意識を持ち、主体的に考えていくからこそ、意見や思いが生まれる。共同実施を行う上で、異なる意見が生まれるからこそ、その場でまたお互いの思いを確認し合うことができ、少しずつお互いの関係性が深まっていくと考えられる。こうした子ども会と保育園の姿から両者の関係は**「生じた課題を乗り越えられる関係」**へ発展したといえる。

３年目の取り組み

昨年度の夕涼み会において、子ども会、保護者会からも主体的な参加があったことを踏まえて、３年目となり初めて、子ども会・保護者会・保育園の三役会議を実施することになった。三役会議は各会の代表者で構成されており、この会議で話し合われたことをそれぞれの会の役員に伝達される組織構成となっている。三役会議において、保育園から子ども会、保護者会へ３年目の役割を依頼しようと考えていたが、保育園から依頼をする前に、子ども会・保護者会から主体的に参加・協力の要請が得られた。子ども会・保護者会の両者とも準備から参加できる人をさらに募集し、夕涼み会の充実に向けそれぞれが自分たちにできる活動を行った。さらに、三役会議では夕涼み会だけでなく、他の園内行事にも良い影響を与え、子ども会からは、七夕やそうめん流しで使用する竹の提供や、保護者会からは竹を切る手伝いを申し出る声も上がった。

昨年度、保護者会活動は活動内容の幅が広がり、３年目の保護者会は会長を中心に今後保護者会の継続と発展に向けて役割の明確化、活動内容の簡素化などを行っている。現在、保護者の誰もが会長、役員ができるような仕組みづくりを行っている。保護者会の夕涼み会への取り組みとして、今年度で３年目を迎える中で「去年より面白くないなんて思われたくない」という会長の思いのもと、保護者全体には、無理をせずに、参加できる時に自分の都合に合わせて参加しようという方針で行事への準備が進行した。また、子ども会会長も夕涼み会の共同実施に大変協力的で、次年度の開催に向けて、子ども会の中で新たな取り組みなどの検討が行われている。

保育園内においても、２年間夕涼み会を体験し、卒園児が帰ってくることの嬉しさやその活動意義を実感した職員数名には、夕涼み会の準備段階から主体的に取り組む姿が現れた。今年度から保育園で勤め始めた職員からも、自分の夕涼み会に対する意見や提案が持ち込まれた。保育者からも意見が少しずつ出るようになり、「保育園園長がやりたい夕涼み会」から「保育者全員で取り組む夕涼み会」へ変化しつつある。

保育園園長からのインタビュー

夕涼み会１年目は、まだ見ぬ夕涼み会という行事の体験を共有。かといって、当時周囲の負担軽減ばかり考えてた私は、園内で職員の気持ちを置いてけぼりにしてしまい大反省でしたね。２年目

からは、保育園・保護者・地域が煮詰まっていない夕涼み会という行事に対して、とにかく一緒に悩み・考え・実施をしてきました。「協同的な関係」が形成されていくその過程は、子どもの遊びが深まっていく過程とどこか近いものがあるかな。子どもたちって乳幼児期から沢山の遊びを体験してこそ豊かな遊びの展開につながる柔軟に思考する力が育まれていくよね。同様に、それぞれの立場を担う大人集団の関係が深まるには、色んな過程を体験せずに発展していくことはまずもって難しい。私には、言葉だけでみんなに意義を実感してもらう話術もありませんし。

ところで、夕涼み会では子どもをまんなかに、沢山の大人たちが一人の参加者として園の活動体験に入り込んでるけど、そんな時って、子どもたちはすごくいい表情しているんですよ。それは、日頃の保育園で保育者と子どもたちだけで過ごす生活にはない表情。大好きな保育園で大好きな家族が一緒に活動している。そんな豊かな思い出を一つひとつ丁寧に手渡していきたいんです。もちろん、相変わらず大人側の負担にも十分に配慮しつつですね。

年度毎に充実していく夕涼み会だけども、課題はまだまだ山積。そもそも、卒園しても支援が必要な家庭にどうやって気づき・支援へつなげていくかへの取り組みはここから、ここからですね。

考察

３年目を迎えた夕涼み会において、保育園を中心として「保育園と保護者」「保育園と子ども会」という関係性ではなく、「地域・保護者・保育園」という三者の関係のもと準備、運営を行うこととなった。保育園として初めは「地域・保護者を巻き込む」という意識だったが、三役会議を行うと保育園の予想を超えて、地域・保護者からは「もっと夕涼み会を楽しいものにしたい」という思いから多くの意見が出された。それぞれの立場から、自分たちができることを互いに出し合い対等な関係で同じ目的に向かい、協同している姿がうかがえる。子ども会・保護者・保育園の三者は行事を通して**「目的を共有し、できることを互いに行う関係」**が構築されたといえる。年を重なることに着実に子ども会・保護者会・保育園が協同で実施する地域の行事として根付いてきているといえる。

Ⅳ．総合考察

本研究では、地域・保護者・保育園との三者が協同的な関係を構築するためにはどのような取り組みが有効か、それぞれの関係性の変化に焦点を当てて検討を行った。経年による地域・保護者・保育園の関係性の変化は図１に示すとおりである。

図１．経年による関係性の変化

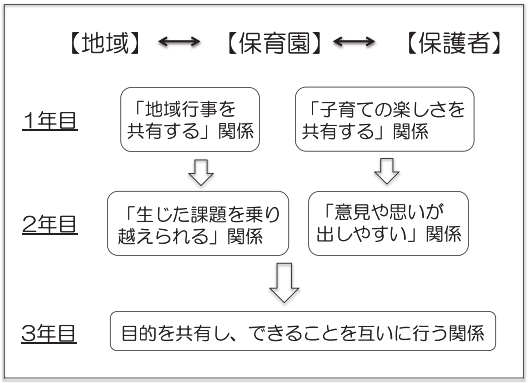

図１より、保育園を中心に地域、保護者それぞれとの関係が、年月が進むにつれて変化している。３年目からは、三役会議を行うなど、地域と保護者との間にも関係が構築され、２年目までの関係とは異なり、三者の関係として「目的を共有し、できることをお互いに行う関係」が成立している。

こうした関係が地域・保護者・保育園との間で構築された要因として以下の３点があげられる。

第一に、協同的な活動を行っていく上で重要である「目的の共有」がそれぞれの立場を超えて理解しやすかったことがあげられる。本研究で対象とした夕涼み会において「地域の子どもや保育園を利用している子ども、卒園児が楽しめる夕涼み会をつくる」という行事の目的や意図が、それぞれの立場を超えて共有しやすく、

また「夏祭り」をテーマとしている行事なため、自分たちが子どもの頃から今までの体験から楽しかったものの提案や、意見が出しやすかったことのではないかと考えられる。

第二に、協同的な関係構築のためには、保育園が、自分たちが行っている保育や、その保育から生まれる子どもの育ちを丁寧に伝えることが重要だと考えられる。２年目の取り組みから、保育園は積極的に保護者からの意見を受け、説明を行うなど丁寧な対応を心掛けた。また、地域と一緒に行事を行うことによって、日頃の保育の様子や、他の園行事に興味をもってもらえるようになり、さらなる保育への参加にもつながっていく。地域・保護者・保育園が対等な立場で、子どもの育ちについて語り合い、より豊かな体験を保障していくために、自分たちができることを出し合うことが重要である。

第三に、行事等への参加において一人ひとりが自分のペースで無理のない範囲で参加できる体制づくりが行われたことがあげられる。３年目の取り組みには、地域、保護者ともに行事に向けての準備の中で自分たちができることを考えて、無理をせずに主体的に参加していく様子が報告されている。子ども子育て支援新制度では、認定こども園の利用において認定区分が設けられており、利用する家庭の就労形態も様々で、行事や日頃の保育への参加に差が生じてしまう場合も考えられる。就労形態などの家庭の状況が十分に考慮された誰もが参加したい時に行事や保育へ参加できる体制づくりが求められる。

地域・保護者・保育所との間の協同的な関係を構築していくためには、十分に時間をかけて少しずつお互いの思いを共有していくことが求められる。行事や保育において、同じ目的を共有し、その実現に向かって対等な立場で意見を交わしながら取り組むことの有効性が示唆された。

本研究では、地域・保護者・保育園の間の協同的な関係構築のための取り組みについて考察を行った。子どもたちの育ちを支えるために、この三者の関係と同様に、保育園内の保育者間においても自分たちの思いを伝え合うような協同的な関係は必要である。今後の課題として、実践報告や保育園園長からのインタビュー記録にもあるように、行事が「保育者全員で協同的に取り組む行事」になるための保育者集団のあり方についての検討が求められる。

謝辞

本論文の発行にあたり一読いただき、承諾をいただいたＭ地区子ども会会長、Ｙ保育園保護者会会長に感謝申し上げます。

引用文献

・加登田惠子（2017）　山口県における地域の「子育て力」に関する基礎的研究～子ども会育成者の地域子育てに関する意識調査を中心に～　山口県立大学学術情報　第10号　pp. 73－90.
・湯谷道雄、高橋司　人と地域を繋げる保育の創造―弓削保育所の実践報告―　佛教大学教育学部会紀要　第16号　pp. 1－12.

参考文献

・伊藤祐子（2017）　保育所保育における保護者との協働・連携のあり方　千葉敬愛短期大学紀要　第39号　pp. 239－247.
・加登田惠子（2017）　山口県における地域の「子育て力」に関する基礎的研究～子ども会育成者の地域子育てに関する意識調査を中心に～　山口県立大学学術情報　第10号　pp. 73－90.
・杉江栄子（2017）　幼稚園における保護者との協同的な保育活動の試み―保育参加による保護者の意識の変容―　愛知教育大学幼児教育研究　第19号　pp. 47－54.
・田口鉄久（2017）　地域連携保育の教育的意義と課題　鈴鹿短期大学紀要　第37号　pp. 115－124.
・田辺昌吾（2016）　家庭と連携した保育を展開するための一方策―保育現場における父親支援に焦点をあてて―　エデュケア　第37号　pp. 19－26.
・湯谷道雄、高橋司　人と地域を繋げる保育の創造―弓削保育所の実践報告―　佛教大学教育学部会紀要　第16号　pp. 1－12.